

小児腫瘍科

○ 小児腫瘍科の概要

1. 小児腫瘍科の特色

現在の医療法上の診療科単位では小児を対象とした標榜診療科は「小児科」のみであるが、その対象疾患の多様性は、内科のそれを上回る。にもかかわらず、殆どの医療需要は単純な感冒症状などであるため、難治性の稀少疾患に特化した専門家育成は極めて困難な状況に有る。

また、稀少疾患は医療経済上も極めて不利な状況にならざるを得ないが、「少ない病気」＝「専門家は不要」ではなく、逆にその稀少性ゆえ高い専門性が必要なのである。

当院は「小児腫瘍科」を単独診療科として院内標榜している、全国でも数少ない小児腫瘍性疾患・血液疾患専門の診療科単位を持つ大学病院である。常勤スタッフの経歴・実績から、小児期の悪性疾患や血液疾患を対象とする診療科として、世界標準の高い専門的臨床レベルを維持していると自負している。

成人・高齢者の発がんは遺伝子の老化として生物学的必然であるが、小児期の発がんは発生生物学的に全く異なった新生物である。この特性とともに、小児という成長発達途上のヒトのがん治療には、自ずと高齢者のがんとは全く異なったアプローチが必要であることを理解しなければならない。即ち、単なる医療行為だけではなく、発生生物学、分子細胞生物学、医療倫理にまたがる幅広い知識の習得と実践が必須であり、高齢者を対象とする場合とは、治療の目標設定や治療の基本原則の著しい差異をわきまえるのは当然である。一例を挙げれば、実践的臨床業務の差異はもとより、がんが若い両親から幼い我が子の命を奪っていつてしまう、という世代交代の概念が逆転した恐怖と不安に凝縮される患者・家族の精神的な支持療法が重要である。このためには、医師としてもっとも重要な素養である「患者の回復のために尽くす」という強い意志と責任感が必須である。

小児腫瘍患者の全身管理には細かい配慮が必要であり、緻密な臨床能力が必須である。体重 5 kg の乳児と 50 kg の成人では水・電解質バランスなどの留意事項が全く異なるのは当然であろう。これは「小児は特殊」ということを意味するのではなく、成人においても当然、要求される知識・能力がより繊細に要求される事を意味する。また、小児に対する侵襲的医療行為は可及的に避けるべきであり、内科診断学の基本である理学所見から多くの情報を得るトレーニングが必須である。聴診器も使わず、触診もせず CT、MRI、PET と言うわけにはいかない。即ち、現在の歪んだ医学教育制度の中で、唯一、真の家庭医あるいは内科医の generalist としてのトレーニングが可能な診療科であり、小児に限らず、一般の内科診療を学ぶ場として最も理にかなったトレーニングが提供できる診療分野であると確信している。

小児は一般に初診時には合併症を持たない故、成人のがん治療に比較し遙かに density の高い殺細胞的薬剤投与が行われる結果、劇的な治療効果を見る反面、あらゆる治療関連有害事象を来す。重症感染症はもちろんのこと、高血圧、糖尿病、膵炎、高脂血症、間質性肺臓炎、血栓症、心筋症など、ありとあらゆる全身臓器障害を来しうる。これらへの的確に対応するため、それぞれを専門とする内科系医師との連携を図る必要が有る。また、固形腫瘍では、外科系医師、画像診断、病理などの集学的連携が必須でありそれらの領域の基本を実践することも要求される。これらが臨床業務遂行上、必要に迫られるため、診療科の枠を超えた幅広い領域について自己研鑽を積むことができる唯一の診療科である。

我々は小児科医であると共に、二次がんや青年期に比較的多い骨軟部腫瘍などを診療対象としており、一般的に想像される「小児科」とは異なり、乳児から若年成人までを診療対象としている。治療を必要とする悪性新生物や血液疾患を抱えた患者の多くがたまたま小児であるゆえに必要とされる専門性を併せ持つ generalist である、と自覚している。

2. 診療実績

開院以来 10 年間の新規入院患者

・ ALL	24 例	・ 横紋筋肉腫	10 例
・ AML	11 例	・ 神経芽腫	4 例
・ MPN	2 例	・ 中枢神経腫瘍	8 例
・ MDS	5 例	・ 骨肉腫	14 例
・ NHL	11 例	・ ユーイング肉腫	8 例
・ 再生不良性貧血	8 例	・ 腎腫瘍	2 例
・ 凝固異常症	3 例	・ 胚細胞腫瘍	6 例
・ 顆粒球減少症	1 例	・ 肝芽腫	7 例
・ 組織球症	4 例	・ 滑膜肉腫	4 例
・ その他の固形腫瘍	6 例		

うち、同種造血幹細胞移植施行例 27 例、自家末梢血幹細胞移植 18 例

3. 診療・教育スタッフ

田中 竜平（教授）：発生生物学、内科診断学、腫瘍学、血液学、造血細胞移植療法
渡辺 温子（講師）：腫瘍学、血液学、代謝異常症

4. 研修責任者と臨床研修指導医

研修責任者：田中 竜平（診療部長）
臨床研修指導医：田中 竜平、渡辺 温子、太田 充彦

5. 臨床研修プログラムの特色

本プログラムでは医師として最も重要な「正確な理学所見をとり、必要な高次の検査を順序立ててその適応を判断しつつ行う」という内科診断学の基本を学ぶことができる。

6. 経験目標・到達目標

一般目標 (G10)

患者および患者家族の「想い」を理解する「医の心」の必要性を理解すると共に、生命科学全般に共通する分子細胞生物学を理解し、腫瘍生物学と腫瘍治療学の基礎（初歩ではない）を学んでいただきたい。

行動目標 (SBOs)

- 1) 挨拶が出来る
- 2) 正しい日本語で日常会話および医学的会話ができる
- 3) 正しい日本語で、他人に理解できるカルテが書ける
- 4) 患者および患者家族と社会人としての接し方ができる

到達目標と評価表 (1ヶ月間研修した場合)

【評価 A：可 B：不可】	自己評価	指導医評価
1. 子供と相手の年齢に合わせて接する技術を学ぶ。	()	()
2. 難治疾患の子供を抱える家族との接し方を学ぶ。	()	()
3. 患者の状態が緊急性を要するの可否かを判断する。	()	()
4. 他科の医師と連携し集学的な診断・治療を理解する。	()	()
5. 終末期の小児の診療を経験する。	()	()

到達目標と評価表 (2ヶ月目以上研修した場合)

【評価 A：可 B：不可】	自己評価	指導医評価
1. 子供と相手の年齢に合わせて接する技術を学ぶ。	()	()
2. 難治疾患の子供を抱える家族との接し方を学ぶ。	()	()
3. 患者の状態が緊急性を要するの可否かを判断する。	()	()
4. 他科の医師と連携し集学的な診断・治療を理解する。	()	()
5. 個々の疾患概念、病因論、診断・治療の歴史を学ぶ。	()	()
6. 病棟内での医師・患者・コメディカルの間で発生する問題を解決する努力をする。	()	()
7. 終末期の小児の医療について実践し、自分の人生観を内省する。	()	()

7. 週間スケジュール

月曜日 外来・病棟業務、回診、チャートカンファレンス
火曜日 外来・病棟業務、回診、看護師との症例検討会
水曜日 外来・病棟業務、回診、チャートカンファレンス
木曜日 外来・病棟業務
金曜日 外来・病棟業務
不定期 看護師への啓蒙的勉強会

8. 研修に関する問い合わせ先

〒350-1298 埼玉県日高市山根 1397-1
埼玉医科大学国際医療センター 包括的がんセンター
小児腫瘍科 田中 竜平（診療部長、教授）
E-mail: rytanaka@saitama-med.ac.jp